

野上記念法政大学能楽研究所

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

能楽研究所が果たした学際的研究の遂行と、その成果の公表、数々の社会連携による、文化貢献、社会貢献は、一私立大学の研究所が成し得る、ほぼ最高レベルに達している。中でも、『英語版能楽全書』の編集完了は、同研究所が求められてきた、グローバルな視野に基づいた研究活動の集大成であり、70年以上に及ぶ研究所の歴史においても記念すべき出来事である。

研究所所蔵資料仮目録の公表や、第三者機関による定期的評価など、残された項目はあるものの、限られた人員と予算内で、これほどの成果を成し得たことは、特筆に値する。

同研究所の優れた活動を支え、さらに発展させるべく、大学理事会をはじめ、社会各層、自治体、国による絶え間ない支援が望まれる。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

研究所の所員一同、それなりに頑張ってきたという自負はあるが、予想以上のあたたかい言葉を頂き、あらためて身がひきしまる思いである。国際化についてもこれがゴールではなく、ここからどのように世界の演劇関係者や研究者と繋がっていけるかが重要だと考えている。しかし『英語版能楽全書』を刊行すればすぐに情報が行き渡るわけでもなく、しばらく時間がかかるはずなので、その間に、遅れている研究所所蔵資料仮目録や、拠点の機能強化支援の予算を獲得して進めているデジタルアーカイブの充実など、何よりの財産である豊富な貴重資料を広く国内外に公開していく仕事を着実に進めていく予定である。能楽研究所はこれから数年の間に専任所員や拠点の研究補助者など、複数のメンバーが入れ替わる時期に入る。どういうメンバーで何をやっていくか、十分に話し合い、外部からの評価や助言などにも耳を傾けて方向を見定めていきたい。

II 自己点検・評価

1 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

1.1①研究所(センター)において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
---	----

1.1②上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績(開催日・テーマ・参加人数等)について記入してください。

研究活動の活性化のため、毎年「公募型共同研究」を公募し、学内外の研究者への共同研究の呼びかけを行っている。2022年度は13件の共同研究を実施し、研究所の専任所員2名、兼担所員3名、兼任所員4名が計8件の共同研究に参画した。研究会はそれぞれの共同研究で実施しているため、実績の全ての具体例を挙げるのは控えるが、例えば、兼任所員1名が研究代表者となり、専任所員1名、兼任所員1名、及び学外の研究者・実演家3名が分担者として加わった共同研究「脇型付「能之秘書」の解説と注釈を通した固定期以前の能演出の研究」では、5月4日、7月22日、8月16日、9月30日、11月11日、12月19日、2月17日、3月7日の計8回にわたる研究会が実施され、江戸初期の能楽資料をテーマに、研究代表者・分担者による輪読と討論が行われた。

2 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2.1①研究所（センター）として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	いいえ
【根拠資料】	

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
 ※2022年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

- ・展示・ワークショップの開催
- HOSEI ミュージアム特別展「危機と能楽」
 - 会場1 九段北校舎1階ミュージアム・コア
2022年9月1日～2023年1月31日（来場者693名）
 - 会場2 ボアソナード・タワー14階博物館展示室
2022年9月1日～30日（芳名帳より判明する来場者120名）
 - 会場3 ボアソナード・タワー26階ミュージアム・サテライト
2022年9月1日～10月19日
 - 会場4 外濠校舎6階ミュージアム・サテライト
同上
- 関連ワークショップ「能に親しむ」（参加者70名）
場所：ボアソナード・タワー26階スカイホール
- 関連シンポジウム「危機と能楽」（参加者50名）
場所：ボアソナード・タワー26階スカイホール
- HOSEI ミュージアム展示（来場者348名）
場所：九段北校舎1階ミュージアム・コア 2023年2月17日～4月26日
- ・他機関との連携によるシンポジウム等の開催
- シンポジウム「囃子の歴史と変容」（能楽学会との共催）（参加者85名）
日時：2023年3月25日（土）
場所：外濠校舎4階S405
- 研究会例会「学校教育における能楽」（能楽学会との共催）（参加者38名）
日時：2023年2月23日（木）
（オンライン開催）
- 矢来能楽堂再建七十周年記念公演（公益社団法人観世九阜会との協力事業）（参加者350名）
日時：2022年9月17日・18日
場所：神楽坂・矢来能楽堂

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、論文、学会発表等）

※2022年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）、論文（著者（当研究所関係者は下線付記）、タイトル等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

- 研究所の刊行物
 - HOSEI ミュージアム特別展図録『危機と能楽—いかに受け止め乗り越えてきたか—』
2022年9月1日刊行 全122頁
 - 能楽研究叢書8『危機と能楽』 2022年12月15日刊行 全199頁

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

紀要『能楽研究』第47号 2023年3月25日刊行 全278頁

○学会発表等

- ・山中玲子「古典の転生と再生—文学と演劇」ディスカッサント 2022年11月5日（オンライン開催）東アジア日本研究者協議会
- ・山中玲子「能《融》が描く場—誰が何をしているのか」2023年3月18日（早稲田大学）国際シンポジウム「古代・中世の廃墟の文化史」
- ・山中玲子「パフォーマンスの規則と記録」2023年3月26日 国文学研究資料館古典籍セミナー（オンライン開催）
- ・宮本圭造「徳川綱吉の能と礼楽思想」 2022年6月12日 芸能史研究会大会（オンライン開催）
- ・宮本圭造「猿楽座の成立と展開」 2022年9月4日 能楽学会世阿弥忌セミナー（オンライン開催）
- ・宮本圭造「能楽における家元制の形成と展開」 2022年12月3日 芸能史研究会東京特別集会（オンライン開催）
- ・宮本圭造「能楽資料の宝庫」 2023年3月26日 国文学研究資料館古典籍セミナー（オンライン開催）

3.1③研究成果に対する社会的評価（招待講演、書評・論文の引用等）

研究所（センター）の活動に対して2022年度に得たと考える社会的評価（招待講演等）を記入してください。招待講演が学会発表の場合も重複してこちらに記入してください。※注

研究所がこれまでに発行した刊行物は多数に上るため、その引用数を全て把握することは困難であるが、2022年に全巻の刊行が完結した『近世諸藩能役者由緒書集成（上）（中）（下）』が学会誌『能と狂言』20号（2022年）、及び学会誌『芸能』28号（2022年）の「紹介」欄で取り上げられ、「今後の研究の基礎資料として」「重要な資料」、「江戸期の能楽の実体を知るうえで貴重」と高く評価されている。

本研究所専任所員の論文引用数については以下の通り。

書籍に関しては、『長唄の伝承』（檜書店、2023年）に専任所員1名の論文が一件引用されている。学会誌では、中世文学会の会誌『中世文学』67号（2022年）所収の1本の論文に専任所員1名の論文が1件、芸能学会の会誌『芸能』28号（2022年）所収の4本の論文に専任所員1名の論文が4件引用されているほか、能楽学会の会誌『能と狂言』20号（2022年）所収の2本の論文に専任所員1名の論文が2件引用されている。また、専任所員1名が監修・執筆をつとめた特別展図録が同誌の「紹介」欄に取り上げられ、「勸進能研究に必携の書であり、かつ政治史、建築史、芸能興行史、美術史などを視野に入れた学際的研究にも展開しうる」との評価を得ている。この他、英語論文では、『Monumenta Nipponia』77号（2022年）所収の1本に専任所員の論文1件が引用されているのが目に入った。これ以外にも大学紀要等に専任所員2名の論文の引用が多く見られ、本研究所専任所員の論文が能楽及び関連の学界においてまず参照されるべき重要論文として高く評価されていることが窺える。

一方、財界の実業者に向けたSMBC経営懇話会実務シリーズNo.262『世阿弥の教育論—成長するとはどういうことか』にも専任所員編集の著書が参考図書として紹介され、実社会への還元にも役立っている。

こうした社会的評価を裏付けに、2022年度に専任所員2名が行った招待講演は以下の通りである。

- ・山中玲子「能楽囃子講座 呂中干舞を知る」2022年5月31日（国立能楽堂講義室）国立能楽堂特別講座
- ・山中玲子「能楽講座《三山》」2022年6月18日（観世能楽堂）観世能楽堂
- ・山中玲子「能の仕組みと魅力を知る」2022年10月1日（佐倉市中央公民館）佐倉国際文化大学

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ・山中玲子「古典の転生と再生—文学と演劇」ディスカッサント 2022年11月5日（オンライン開催）東アジア日本研究者協議会
- ・山中玲子「パフォーマンスの規則と記録」2023年3月26日 国文学研究資料館古典籍セミナー（オンライン開催）
- ・宮本圭造「猿楽座の成立と展開」 2022年9月4日 能楽学会世阿弥忌セミナー（オンライン開催）
- ・宮本圭造「是真の能狂言画とその時代」 2022年11月2日（於国立能楽堂講義室）国立能楽堂特別講座
- ・宮本圭造「能楽講座《碇潜》」2023年2月7日（観世能楽堂）観世能楽堂
- ・宮本圭造「仮面の魔力」 2023年3月4日（於奈良春日野国際フォーラム薨）奈良県立美術館開館50周年記念特別展プレイベント
- ・宮本圭造「能楽資料の宝庫」 2023年3月26日 国文学研究資料館古典籍セミナー（オンライン開催）

能楽研究所が公開しているデジタルアーカイブへのアクセス数は以下の通り。

- ・能楽資料デジタルアーカイブ 2876回
- ・伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ 591回
- ・金春家旧伝文書デジタルアーカイブ 9813回
- ・昭和初期能楽映像アーカイブ 300回

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2022年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会によるチェックやアドバイスを受けている。学外の委員には、早稲田大学演劇博物館の前館長、理化学研究所のチームリーダーなど、長年にわたって大型研究プロジェクトを率いてきたメンバーも多く、他機関との研究協力のあり方や予算の立て方など、具体的な研究方針についても、たいへん有益で実際的な注意・注文・助言等を得ている。

また、文科省の共同利用共同研究拠点として、毎年度、詳細な実施計画書と実績報告書を提出し、研究実績や今後の研究計画等について審査を受けている。

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況

※2022年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金及び2022年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者（代表・分担の別）、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

【代表者として採択】

- ・山中玲子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05～2025-03-31 2,430,000円(21H04350)
- ・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究 2020-04-01～2025-03-31 1,100,000円(20H01234)
- ・山中玲子 特別研究員奨励費 世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析 2021-04-01～2024-03-31 400,000円(21F21702)

【分担者として採択】

- ・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01～2023-03-31 50,000円(20K00136)
- ・山中玲子 基盤研究(C) 古代・中世日本における廃墟の文化史 2020-04-01～2023-03-31 150,000円(20K00337)

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

・宮本圭造 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05～2025-03-31 100,000 円(21H04350)

※注 社会的評価に該当するその他の例として、研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対する2022年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2022年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等も含む。研究所(センター)に該当するものがない場合は、研究所に所属している所員によるものを含めることも可、その場合は研究所の研究領域に関する論文や刊行物等とする。社会的評価の対象となるものが論文や刊行物等である場合、それらが公表された時期については問わない。また、実績等は把握できている範囲で記入。

Ⅲ 2022年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準		研究活動
中期目標		学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
年度目標		貴重資料及び能楽雑誌のデジタル化と公開を進めるとともに、共同研究の成果である各種データベースをウェブ上で公開する。 オランダ Brill 社より A Companion to Nō and Kyōgen を刊行する。
達成指標		大正期の雑誌約 140 点、貴重資料約 300 点のデジタル公開。 A Companion to Nō and Kyōgen の刊行。
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	デジタルデータ化は順調に進行し、大正期の雑誌は約 150 点、貴重資料は約 340 点のデジタル化を完了した。このうち、貴重資料については、今年度中にデジタル公開を開始できる見込みである。大正期の能楽雑誌については、本研究所が所蔵するすべての能楽資料を横断検索できる新規サイトを構築し、そこにアップする予定であったが、公開のためのインターフェイスを作るに際して予定していた業者の見積もりが予算を遥かにオーバーしたため、あらためて別の業者に発注することになり、仕様をスリム化し、現在公開に向けて準備中である(年度末には仮サイトを公開予定)。 A Companion to Nō and Kyōgen も、緻密な校閲作業が年度末に終了したところでこれから印刷にかかるところである。
	改善策	A Companion…の遅れ: 様々な事情や仕事を抱えた独立した研究者が多数集まった共同作業であるため、スケジュール通りに進まないことがあり、能楽研究所のスタッフの努力ではカバーしきれない面もあるため、現実的に無理のない達成目標を掲げるようにする。
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
年度目標		社会の変革期や危機の時代の能楽をテーマに、法政ミュージアムでの特別展示と関連シンポジウム、矢来能楽堂とも協力してのワークショップ等を行い、能楽の普及・発展に役立てる。 市民大学・国立能楽堂・各流能会等での講座・解説を行う。
達成指標		展示・シンポジウム関連の入場者のべ 500 名以上。 各種講座・解説等への出講 3 回以上。
年度末	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	展示はミュージアム・コアの来場者が 693 名、BT14 階展示室の来場者

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

報告		は120名であった。また、関連企画のうち、シンポジウムの参加者は50名、ワークショップ（全2回）の参加者は計70名であった。 講座・解説等の実績は、国立能楽堂での公開講座が2回、佐倉市民大学での講座が1回、能楽堂での講座・解説が7回であった。
	改善策	特になし
<p>【重点目標】 特別展示および関連事業は能楽研究所70周年記念事業でもあるのでこれを重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 研究所と同じく70周年を迎え、従来も協力関係にある矢来能楽堂（観世九阜会）と組み、能楽堂での催しに研究所も参加し、また、研究所のシンポジウムやワークショップに九阜会のリーダーである観世喜正氏を迎える。さらに、九段の靖国神社能舞台や能楽研究所のある法政大学と矢来能楽堂をつなぐ、神楽坂の町おこし関係の人たちとも緩やかに繋がりながら進めていく。</p>		
<p>【年度目標達成状況総括】 70周年記念事業は、展示もシンポジウムも好評のうちに終了することができた。矢来能楽堂が神楽坂の商店街に向け積極的に広報活動をおこなってくれたが、能楽研究所でも、神楽坂の「おかみさん会」に協力を仰ぎ、神楽坂の老舗のあちこちに記念事業のポスターや関連地図等を貼ってもらうことができた。矢来能楽堂の協力により、来日直後の留学生向けに能のワークショップを開催することもでき、一方で、能楽研究所が作成した矢来能楽堂の歴史を示す写真パネルを介して、豊島区の文化事業関係者との繋がりも生まれた。</p>		

IV 2023年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
年度目標	多分野の研究者との共同プロジェクトを進める前提として、能楽研究所が所蔵する膨大な能楽資料の網羅的な横断検索が可能なシステムを確立し、データの拡充に努める。また、国際的な能楽研究の推進のため、英語版の能楽資料デジタルアーカイブの構築を目指す。
達成指標	能楽資料の網羅的な横断検索が可能なサイトの公開。新たに能楽資料300点以上をデータベースにアップ。英語版能楽資料デジタルアーカイブのサイトの構築。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
年度目標	英語版の能楽資料デジタルアーカイブに最新の研究成果を盛り込むとともに、能楽の普及・研究成果の社会還元に向けた様々な取り組みを展開する。
達成指標	英語版能楽資料デジタルアーカイブに20点以上の目録・画像データをアップ。普及・社会貢献のための講座等5件以上。
<p>【重点目標】 能楽研究所が所蔵する膨大な能楽資料の網羅的な横断検索が可能なシステムの確立とサイトの公開。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

専任所員だけでなく、兼任・兼担の各所員とも協同し、能楽研究所の所蔵資料の目録データの整備に努めるとともに、RAの協力も得て、近代能楽雑誌のデジタル化を大きく前進させる。システムの構築とデータのアップについては、文科省機能強化支援の研究資金を積極的に活用する。

【大学評価総評】

野上記念法政大学能楽研究所は、国内外の研究者と協力して、豊富な文献資料に基づく研究を行っている国内唯一の能楽に関する総合的な研究機関であり、法政大学において特筆すべき存在となっており、外部資金の獲得等による継続的な研究とその成果普及に尽力している。昨年度には『英語版能楽全書』の編集が終了し、その普及のために海外への情報発信を目指し、英語版能楽資料デジタルアーカイブのサイト構築に取り組む予定である。また、HOSEI ミュージアムでの展示も好評を博しており、本年度以降継続的な開催が期待される。これらの取り組みによって、能楽の魅力が日本だけでなく、世界に広まることを期待している。

本年度の目標としては、能楽資料の網羅的な横断検索が可能なサイトの公開や、英語版能楽資料デジタルアーカイブのサイト構築、普及・社会貢献のための講座などについて、具体的な数値目標を設定している点は高く評価できる。ぜひ、これらの目標を達成していただきたい。

「研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか」に関して、専任所員・兼任所員がいずれも科研費の共同研究のメンバーとして研究倫理教育「APRIN eラーニングプログラム（eAPRIN）」を受講し、現状において適切に対応されていることを確認した。今後は、科研費のメンバーではない新たな専任所員・兼任所員が加わる場合、学際的な研究を進めていく中でアンケートや個人情報の取り扱いが必要となる場合などが考えられることから、あらかじめ適切な措置を講じることが望まれる。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を 確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない箇所がある
---	------------------------------

<法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目>

2.1①研究所（センター）として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。